

George Eliot: Victorian Women and Her Heroines(2)

(1989年4月7日受理)

石田美栄
Mie Ishida

Key words: 19世紀, 英国, 女性

I

George Eliot: Victorian Women and Her Heroines (1) において、ジョージ・エリオットの描く女性人物の理想はその当時革新的なものだった、すなわち女性が自ら自我を確立してゆく伝統のまだない中で、お仕着せの女性像に反発して、自己実現への道をさぐると述べた。*The Mill on the Floss* の Maggie は自我放棄すなわち死であり、*Daniel Deronda* の Guendlen は自我の敗北であるのに対して、*Middlemarch* の終りには明るいものが見られる。しかし Dorothea が求め続けたものは、こんなことだったのかという感想ないし失望を禁じえない。Barbara Hardy は次のように言う。

It might be argued that George Eliot always evades the tragic conclusion: Maggie is rescued by death, and by a death which acts as a symbol of reconciliation; Dorothea is rescued by Casaubon's death and by her personal happy ending. But there is in these two cases a very much fuller demonstration of the frustration and loneliness and pain which precedes the tragic conclusion — or evasion.¹⁾

死による和解 (Maggie), あるいは (夫の) 死により失敗から救われ (Dorothea), ハッピーエンディング (一応は) になるというが、その時代の女性のおかれた状態を知るならば、そのあたりの物足りなさや矛盾をよりよく理解することができる。例えば、ヒロインたちは自分の生き方を強く求めるにもかかわらず、大体において職業を持った女性は出てこない。ヴィクトリア朝前半の中流階級の女性が自らを養うことのできる職業はほとんどなく、また中流階級の人たちは女性が働くことを不運、不名誉とみなした、そして生計を立てなければならぬ教育ある女性に許された職業は家庭教師だけだった。しかし、エリオットは “carefully refrains from showing Jane Eyre.”²⁾ であった。

Middlemarch は1872年の作品であるが、その時代背景を1829年11月から32年3月におき、その後20年余りの一応幸せな様子を付け加えて結んでいる。選挙法改正が話題になり始め、1837年以後1900年までには、女性の権利、地位は大きく変わったとはいえ、ヴィクトリア朝前期の一般女性の実際の状態は、1872年であっても、まだまだ旧態依然たるものがあってと想像される。小説はその当時の人々の生活をよく反映しているものであって、いかに革新的なものを求めたとしても、その時代の実態を大きく外れた解決方法を用いることはできず、どうしてもその時の枠組に縛られたものとなろう。従ってエリオットがいかにか “took a very wide survey of the possibilities open to women in the late and early nineteenth century”³⁾ であっても “Maggie and Dorothea both begin life as exceptional human beings but achieve lit-

tle or nothing.⁴⁾ とならざるを得なかったのである。

II

Merryn Williams は *Women in the English Novel 1800 – 1900* の冒頭「社会そして小説における女性」の中で、1800年英国の女性にはほとんど権利などなく、1792年に Mary Wollstonecraft の *Vindication of the Rights of Women* が出たけれども、物笑いになったと書いている。しかしヴィクトリア女王の時代になって（1937）から、次々に女性の権利が認められ、1900年までには選挙権はまだなかったが、以前に較べれば、ずっと解放されるようになった。そして、女性のためのいい学校や仕事も増えて、女性が家庭の外の社会で活躍するようになり、女性の生き方が論じられるようになった。「しかし、それより以前には、よりよい教育を受けた女性の間には、大きな不幸や失望があった。そうしたことが、その頃女性たちが書くようになっていた小説の中で、大いに表現されている。⁵⁾」と述べ、女流作家の時代だったとして、Jane Austen, Charlotte Brontë, Emily Brontë, George Eliot を “four really great writers” に挙げている。

エリオットはそうした、女性の生き方、価値観が、大きく変わろうとしていた、しかしまだ “But women still had to face enormous legal, social, and cultural difficulties, . . .”⁶⁾ という中で、自らも私生活の上で大変な苦悩、矛盾、無念さの中に人生を送らざるを得なかった。当時文学は女性に平等を認めた数少ない職業の一つで、女流小説家やジャーナリストは常に男性と同等の条件で賃金を支払われたという状況の中で、「女流小説家の時代」であったといわれる。そんな中でも、エリオットは4人の偉大な作家に数えられるが、それでも女性によるものだと判ると小説が真面目に受け取られなくなる向きがあったので、男性の偽名を用いたのだった。

エリオット程の知性と才能の持主でも、30才過ぎてから作家活動を始め、父親が死ぬまで家庭に留って世話をし、献身的な看護婦であり家政婦だったといわれている。私的な生活においては、女性は自分のことを真先に考えることはできないという自覚のほどがわかる。またジョージ・H・ルイスとの本当の結婚生活も社会的には同棲、愛人あるいは不倫の女という後ろめたさの中に暮さなければならなかった。ルイスの子供たち（妻の不貞の子）の面倒をよくみ、ルイスとの幸せな関係、自分になら非がなかったとしても、ルイスは子供たちが私生児となることをきらって自分の子供として認知していたから、妻との離婚は不可能で、エリオットは愛人の座に忍従するしかなかった。人々が間違った結婚をしたということが、次第に認められるようになってきて、19世紀後半には、ある状況での離婚は合法になったけれども、まだ離婚はめずらしかった。

こうした様々な事情を考えてみる時、エリオットの心の葛藤、悔しさはどんなものだっただろう。小説家たちが19世紀の後半には、間違った結婚という問題に関心を持つようになり、エリオットもこの問題を扱っている。なるほど *Middlemarch* は誤った期待をもって結婚した二組を描いた作品で、Dorothea は夫の死によって解放されるけれども、Lydgate は「悲しく諦めて狭められた運命」を受け入れざるを得ない、ということが出来るが、その時代をよく知って読めば、作品の意図や限界などがよく判ってくるものである。

エリオットの生きた（1819–1880）19世紀英国社会の女性の姿をもう少し詳しくみてゆきたい。この

時代はまだ、あらゆる人が女性は男性より劣るのであって、結婚が女性の自然な宿命だとみなしていたので、あらゆる不利なことが起ってきたのだ。1800年には選挙権は勿論なく、その後50年間議論されることさえなかったわけだが、結婚すれば財産を所有することができなくなり、子供の後見人になる権利もなかった。中流階級の若い女性は、結婚前に男性と自由に交わることができず、両親の認める人たちとしか会えなかった、そして一人で生活することも、一人で旅行することもできなかった。こうしたそれまで女性の歴史をおおっていた、大きな暗黒から、女性たちが出始め、ほとんどあらゆる生活領域において、特に著名な女性たちにとっては、ヴィクトリア女王の時代は注目すべきものがあった。しかし、一般に女性たちはまだまだ多くの困難に立ち向わねばならなかったので、有名になったような諸姉たちと同様に才能がありながら、誠実に陰の人生を生きたということである。

19世紀の英国では、移民の増加などによって、女性と男性の人口差がひろがり、1801年の人口調査では女性の方が約40万人多く、1901年にはついに100万人の女性超過となった。そして中流階級の女性は一般に自活できなかったから、便宜的な結婚やお金目当ての結婚も多く、女性たちは独身のままになることを恐れ、未婚の女性やオールドミスは憐れみと軽蔑の混った目で見られた。そしていったん結婚したら、夫から離れることは非常に難しかった。また、娘に財産をやることはできたが、結婚すれば、いや婚約するやいなや未来の夫の同意なしには、自分の財産を処分することができなくなった。自分自身の収入でさえも自分のものではなく、たとえ夫ともういっしょに暮していない場合でさえ、夫が全部取ることができた。1857年婚姻事件法は、法的に別れた妻には自分の稼いだものを持つ権利を与え、そして1970年、何年もの運動の後、最初の既婚婦人財産法が成立した。1882年の法律は女性に対して、自分の収入を完全に自分の思うようにできる権利を与えた。

19世紀にはずっと、父親が嫡出子の当然の後見人と考えられており、1839年以前には、父親は母親から子供たちを取りあげることができた。そして母親は必ずしも子供たちに会うことを許されなかった。1839年の未成年者監護法は、母親に7才以下の子供の監護をできるようにさせ、7才以上の子供には会いに行けるようにさせた。そして1873年法廷に16才以下の監護を認めさせる権限が与えられた。1857年以前には、私的議会による以外、離婚は不可能であって、大金持ちだけが離婚することができた。1857年の婚姻事件法によって、男は妻の不義を理由に離婚できるようになったが、女は残酷とか遺棄といった他の状況によって強調される不義を証明しなければならなかった。

19世紀の小説の典型的なヒロインは仕事を持たない娘である。中流階級の人たちは女性が働くことを不運、不名誉とみなした。普通若い娘の家庭での生活は限られており、つまらないものだった。若い娘たちは家庭で勉強はしたが、それは度々花嫁修行程度のものだった。すなわち教養としてみせかけで表面的に魅力のあることが大切なことなので、特に男性との関係や結婚については、それ以上のしっかりした学識は実際不利になるのだった。そして生計を立てなければならぬ教育のある若い女性は家庭教師になるよりほかに道はなかった。それも一般に賃金は低く、賄いだけのときもあった。働く女性の大多数は、召使い、工場労働者、お針子、農場労働者、家内工業の労働者であった。1842年に女や子供は炭坑で働くことを禁じられるまで、女たちは地下で働いた。1847年、1850年の工場法は女性の1日の労働時間を10時間に制限した。

19世紀に出版された小説家の約半分は女性であった。このことは著者が中流階級の女性の生き方にならうまく適合したことを示している。働きに出る必要がなく、女性に平等を認めた数少ない職業の一つで、男性と同等の条件で賃金が支払われたからである。しかし女流小説家たちには多大な機会があっ

たけれども、また大きな問題もあった。女性によるものだと判ると小説が真面目に受け取られなくなる向きがあった。その上、私生活においては、女性は自分を真先に考えることはできず、家庭責任が優先したから、二重の生活は重荷であった。

こうした中にも、独身女性の窮状を心配する人々が、彼女たちをキャリアのために訓練することについて真剣に話し始めた。女家庭教師への同情が強くなり、きちんとした訓練を受けていないために、ひどい賃金が支払われていることが判ってきた。教師になりたい女性のためにクィーンズ・カレッジ（1948年）とベッドフォード・カレッジ（1849年）が開設された。1857年には職業安定所を設立、長い闘争の後1970年代後半になって医師としての資格を持つことができるようになった。19世紀の終りの40年には、女性の店員、電話交換手、事務員、秘書など女性の職業は増加していった。1851年には『ウェストミンスター・レビュー』に「女性の解放」の記事が出るなど、1860年代には婦人参政権が嘲笑なく語られ始めた。そうはいっても、まだまだ女性の教育は夫の気に入るようにそして夫の親友たちの気に入るようさせる範囲においてのみとか、また何年もの間、もし女たちが権利を求めて騒ぐならば、女は駄目になり、優しさを失うだろうという議論が繰り返し、繰り返し聞かれた。1889年になってまだ、100人以上の有名な女性たちが「婦人参政権に反対する訴え」を出版したほどだった。それでも女性たちが目にみえて市民生活にかかわるようになり、女性の方は家庭だと言い張ることは益々難しくなった。またもっと小さな変化が女性の解放に役立ったという、それは自転車は1890年代に広く使われて、女性が一人でも動くことを可能にし、女性の信じられない程堅苦しい服装が自由に動けるように変えられていったということである。1890年には女性問題があらゆるところで議論されたということは、かつてタブーだった多くの事が小説の中で話題になっていたということだった。次第に多くの作家たちがダブルスタンダードを非難した。力説点が家族と家で暮す娘から独立した市民としての若い女性へと移っていった。19世紀の終りには、益々多くの人たちが、「女性は自分の人生をいかにすべきか」という疑問を投げかけるようになっていった。そしてもはや一つの明確な答えはなかった。（この節は Merryn Williams, *Women in the English Novel 1800-1900*の最初の2章 “Women in Society and in the Novel” を参考にした。）

こうしてみると、エリオットが生きた時代は変化が始ってはいたが、まだ新しい幕開きとまではゆかず、新旧価値観の混乱した、ある種の女性たちにとっては特に苦難の時代であったことが推察できる。

III

このような時代を背景にして、今度は作品そのものをもっと詳しく分析してゆきたい。特にそこに登場してくる女性たちに視点を当てて、彼女たちの結婚、夫婦関係を論じてみる。この作品では次々に起る事件がいつも男同志よりもむしろ男女（友人、恋人、婚約者、夫婦）の間でどのように受け止められ、反応し、その結果事態がどうなってゆくのかということが描かれている。そして Dorothea の生き方を中心に、男性の Lydgate の生き方と対比される。

登場する女性たちは、三つのタイプに分けることができる。Celia はまあまあ無難で普通の女性、Mrs. Vincy, Rosamond はぜいたくで、自己中心の、甘やかされた女、そして Mrs. Garth, Mary, Mrs.

Bulstrode といった賢い、献身的な家庭の女たちである。男たちの人生は、これらのどのタイプを相手に持つかによって左右されてくる。答えは明白で、Garth (Mrs. Garth), Fred (Mary), Bulstrode (Mrs. Bulstrode) たちは伴侶の賢明な理解、助言、支えによって難を乗り越えたり、失敗を免れたり、道をきり拓いてゆくことができる。Celia は結婚して赤ちゃんを生んでということだが、とりたてていう程の影響力を及ぼすことはない。その他の女たちが主として男たちへの影響という意味で見られているのに対して、Dorothea だけは違っている。Dorothea は、彼女自身の生き方を探り求めてゆく人物として描かれている。

Dorothea も Maggie 同様にその時代の Middlemarch の地域社会においては、いわゆる変った娘、なにをやりだすかわからないところのある女性だが、教育もあり、社会的活動に目覚めている。Gordon S. Haight はこの作品の前書きで “Dorothea Brooke like Rosamond longs to be different from those around her. . . She is saturated with that intense Victorian urge to be useful: . . . Born a generation later she might have become a Florence Nightingale or an Octavia Hill.”⁷⁾ と評している。*The Mill on the Floss* の創作年代からは12年たっていることもあり、Maggie のように自我の放棄すなわち “死” という結末になるのではなく、知性も教養もある Dorothea の場合は、自我・自己実現を求めて、社会的なものにも目を向け、悩んでいる。

中央では女性の権利の運動が進められ、女性にも教育の道が開かれ、女性の仕事が増えてきたといっても、地方への浸透はまだまだであったと考えられる。小さい町や田舎の人々の考えが変わるまでには年月のかかることである。従って作品そのものの時代設定は1820年代の終りで、結末としてその後10年20年の様子が概略されている。そんな中で、教育あるまた少し進んだ女性が自分の生き方を考え、求めようとするのは、いつの時代も大変なことである。

Dorothea が18才くらいの娘として、自分の人生について悩んでいる様子を次にあげてみよう。

For a long time she had been oppressed by the indefiniteness which hung in her mind, like a thick summer haze, over all her desire to make her life⁸⁾ greatly effective. What she could do, what ought she to do?

I should learn to see the truth by the same light as great men have seen it by. And then I should know what to do, when I got older: I should see how it was possible to lead a grand life here —now—in England. (p. 21)

しかし第一章の冒頭に “Since I can do nothing good because of a woman, Reach constantly at something that is near it.” と *The Maid's Tragedy* から引用しているように、女性自らはどうにもならなかったから、また結婚が女性の自然な宿命だとみなされていた時代だから、自己実現を目的に結婚する。Merryn Williams はエリオット評の中で次のように述べている。

It was not in Dorothea's power to change 'the society into which she was born', . . . The only satisfying future which she can imagine is being the wife of a great man —. . . and helping him in his work.⁹⁾

Dorothea が選んだ相手 Casaubon を他の人々がどうみているか拾いあげてみよう。

“How very ugly Mr. Casaubon is !” “Mr. Casaubon is so sallow.” (Celia) (p. 27)

“He is no better than a mummy !” “He has one foot in the grave.” “. . . For this marriage to Casaubon is as good as going to a nunnery.” (p. 43)

“He has got no good red blood in his body.” (p. 52) (Sir James)

Lady Chettam は Casaubon のことを次のように言う。

“Really, by the side of Sir James, he looks like a death's head skinned over the occasion. Mark my words: in a year from this time that girl will hate him. She looks up to him as an oracle now, and by—and—by she will be at the other extreme. All flightiness !” (p. 67)

普通の女性である Celia と Dorothea が姉妹であるから、妹の Celia は変った姉のことをいつも心配しており “. . . ,never looking just where you are, and treading in the wrong place. You always see what nobody else see; . . .” (p. 27) と言う。そして涙を浮べて “A Dodo, I hope you will be happy.” (p. 27) と。父親程も年の違う27才も年上の Casaubon と結婚する当の Dorothea は次のように考えている。

“I should wish to have a husband who was above me in judgement and knowledge.”

“. . . Marriage is a state of higher duties. I never thought of it as mere personal ease.” (p. 30)

Casaubon の仕事を助けることで “a fuller life”, “an ideal life ” が求められると考える。

ここで、Dorothea と Casaubon の結婚にはいくつかの疑問が起る。Dorothea 程の美貌も知性も教養もそなえた女性が、誰もいいと思わない Casaubon のような男性に本当に心引かれたのだろうか。いやそうではない、ただ単に知識への無知な憧れで、冷い Casaubon, “the shadow of a man ” 同様、Dorothea の方にも熱情すなわち肉体的な愛の要素が全く欠けていたのである。この点については、後でもっと詳しく論じてみたい。次に、Dorothea が情熱をかけていた、一番の関心事だった慈善のための小屋の建設について、Casaubon が無関心であることに苛立ちながら、それに情熱を示す、共感があるはずの Sir James の愛をなぜ受け入れなかったのか。それは恐らく、先にも述べたように、様々な変化の中で、新旧の価値観が交錯していたことと、Dorothea 自身の “Dorothea, with all her eagerness to know the truth of life, retained very childish ideas about marriage.” (p. 7) によるものであろう。

この結婚が間違っていたこと、Dorothea が “childish” であったことは、もう新婚旅行で早々と判ってくる。結婚相手の仕事・研究を通じて自分自身が生きることを期待していた Dorothea は新婚旅行先のローマで、結婚後6週間にして涙を流すことになる。この涙をどう説明するか。先ず、Dorothea が夢みていた結婚生活と現実の “confusion”, すなわち Casaubon は「妻に従順な秘書兼看護婦役も求め¹⁰⁾」ているだけで、自分の仕事に深く立ち入れられることを好まなかった。ローマでの Casaubon は “He goes to read in the Library of Vacican everyday, he is very busy. He is usually away almost from breakfast till dinner.” (p. 152) また数々の遺跡、名作を Casaubon が説明してくれた時、Dorothea 自身にそうし

た物への興味、情熱と結びついてゆく人生の動機がなにもないので、それも空しいものとなる。このような場面は、つい D. H. Lawrence の *The Rainbow* や *Women in Love* の Ursula や Gudrun を想い起させる。時代はもう20世紀になっており、本質的には似たような女性たちだが、彼女たちは強い自我を持っているから、こうした場面では彼女たちが相手の男性を忘れて、寺院とか自然に陶醉して自分だけの精神界へ入っていった。Dorothea の場合は、時代の差であり、相手によって生きがいを見い出して行こうとする女性の哀れさである。

しかし、今述べてきたこと以上に重要な意味は、精神的（あるいは知性への希求）と肉体的（あるいは性的）の問題である。*The Mill on the Floss* の Maggie も同様に、Philip と Stephen の二人の男性の中に二面性が映し出され、Maggie 自身の中で肉体と精神の分裂を起すことになり、どうにもならない破目に陥る。性への言及がタブーの時代であったが、それでもエリオットは「性を絆とするこの人間関係（結婚）の実体にぎりぎりまで肉薄し得たことは驚嘆に値する。¹¹⁾」従って、Dorothea の涙の本当の意味は、性的色あいを排除しようとしているにもかかわらず、“化石人間” Casaubon との渴いた新婚生活、官能的・肉体的愛の欠如した中で、Ladislaw と再会したことによるものである。ローマで見た Dorothea の印象を Ladislav の友人 Naumann は “a sort of Christian – sensuous force controlled by spiritual passion” (p. 141) と評している。本当は Dorothea と Ladislav の情事なのだが、エリオットはぎりぎりのところで次のように表現している。

Each looked at each other as if they had been two flowers which had opened then and there. . . . it seemed fresh water at her thirsty lips to speak without fear to the one person whom she had found receptive; . . . (p. 266)

But Will Ladislav always seemed to see more in what she said than she herself saw. Dorothea had little vanity, but she had the ardent woman's need to rule beneficently by making the joy of another soul. Hence the mere chance of seeing Will occasionally was like a lunette opened in the wall of her prison, giving her a glimpse of the sunny air; . . . (p. 265)

そしてこの後ずっと、Ladislaw とは、その名前が出るだけでも Dorothea の肉体を震わせるものである。

次に Dorothea と Lydgate の関係について論じてみたい。Lydgate と Rosamond の結婚も、もう一つの失敗として描かれているわけだが、Rosamond という女性はその時代の中流階級を代表する典型的な女である。

. . . had just the kind of intelligence one would desire in a woman. . . . Lydgate felt sure that if ever he married, his wife would have that feminine radiance, that distinctive womanhood which must be classed with flowers and music, that sort of beauty which by its very nature was virtuous, being moulded only for pure and delicate joys. (p. 121)

こんな Rosamond の美しさと気ままな魅力に引かれて結婚した Lydgate だったが、2 人の間は “Between him and her indeed there was that total missing of each other's mental track, . . .” (p. 428) ということになる。医者という仕事も当時それ程いい職業ではなかったようである。夫あるいは男の危機に際して Mary, Mrs. Garth, Mrs. Bulstrode が男たちの支えとなるのとは対照的に、Rosamond は思慮分別に欠け、利己的で、仕事についても無理解で、Lydgate の逆境にあっては “nothing”, いやむしろ障害となる。Rosamond は Lydgate の職業よりも、他所からやってきたこと “stranger”, 彼の家柄・親類のいいことに心を動かされて結婚したわけだから、当時としてはそれも当り前のことであつたろう。医者としての情熱、研究に熱心で、社会への貢献・野心に燃える Lydgate である。

Such was Lydgate's plan of his future: to do good small work for Middlemarch, and great work for the world. (p. 110)

こんな Lydgate の生き方は、女性ではあるが、本当は Dorothea の人生観とぴったり一致しているわけで、二人の間に協調、同感、一体感をみることができる。しかし二人が結ばれるということはない。夫の Casaubon が何の価値もない無駄な研究をやっていることが判ってくるのと、Lydgate の社会正義への生き方 “Lydgate was ambitious above all to contribute towards enlarging the scientific, rational basis of his profession. . . .” (p. 109) が際立ってくる。また同時に Dorothea のような人間が女性であることの無念さを感じさせてくれる。Lydgate がいよいよ切羽結った時、二人の間は一組の男女ではなく、Lydgate にとって Dorothea は救世主の働きをする。Dorothea の人の心を理解する素晴らしさ、人への信頼、思いやり、これぞ男女を越えた人間の愛・救済である。「ドロシアの悩みは、自己犠牲にして悔いがないような大義・目的・理想を同時代の社会に見出すことができないことにある。ドロシアほどの人物が妻および母としてしか知られていないのを残念がったが、... ジョージ・エリオットは、当時のイギリス社会で女が崇高偉大な歴史的偉業を行なうことは不可能だと感じていた。そしてその不可能の中から、女の理想および手本として、聖女のイメージをひねりだしている。¹²⁾ これは織田元子の『フェミニズム批評』の中の *Middlemarch* 批評であるが、まさに “Virgin Mary” の役を演じさせ、人間至高の魂をみせてくれる。

As Lydgate rode away, he thought, “This young creature has a heart large enough for the Virgin Mary. . . . She seems to have what I never saw in any woman before—a fountain of friendship towards man—a man can make a friend of her. (p. 563)

Dorothea は、いったん人生をかけた夫の仕事がなんの役にも立たないと判った時、絶えず墓場のイメージで描かれていた Lowick での Dorothea の生活に光の存在が感じられ始める。

She longed for work which would be directly beneficent like the sunshine and the rain, and now it appeared that she was to live more and more in a virtual tomb, where there was the apparatus of a ghastly labour producing what would never see the light. To-day she had stood at the door of the tomb and seen Will Ladislaw receding into the distant world of warm activity and fellowship

—turning his face towards her as he went. (p. 348)

こんな折、Casaubon は自分の死を予知して、それまで Dorothea が深く立ち入ることを拒否していた研究を、急に夜を徹して手伝わせる。死んだ場合には、自分の願望をかなえてくれるかどうか知りたいと迫る。夫が一生をかけてきた研究を仕上げてあげなければならないという憐れみの気持はあるものの、生きている間とはにかくも、死んだ後まで無駄な仕事に携わるわけにはゆかないと Dorothea は思う。Maggie のように敗北するのではなく、Dorothea は自我に目覚めてゆく。

Dorothea's native strength of will was no longer all converted into resolute submission. (p. 391)

The Synoptical Tabulation for the use of Mrs. Casaubon, she carefully enclosed and sealed, writing within the envelope. "I could not use it. Do you not see now that I could not submit my soul to yours, by working hopelessly at what I have no belief in ?—Dorothea. (p. 393)

研究をまとめる仕事についても、Ladislaw との結婚についても、どちらも夫の遺言には従わず、結局自分の望む道を選ぶ。家庭の反対をも押し切ったの、Dorothea の強い意志による人生の選択であるというものの、結婚は結婚である。つまり、Mrs. Cadwallader のいう "But I see clearly a husband is the best thing to keep her in order (p. 392) なのである。

女性の生き方として「自己犠牲にして悔いないような大義・目的・理想を同時代の社会」では許されない、「ドロシヤほどの人物が妻および母としてしか知られていないのを残念」がり、エリオットは「当時のイギリスの社会で女が崇高偉大な歴史的偉業を行うことは不可能だと感じていた。」そこで、それならば、過去の妄想に生き、なんにもならない資料収集に一生を費やしていた Casaubon から、全く別の、真に現実である政治家になる Ladislaw と結びつけるのは大変興味深い。これこそ現実の社会に結びつくところで、妻として最も内助の功を発揮できる結婚である。しかしこの Ladislaw との結婚は財産のことや身分のことで大いに問題となる。普通の目を代表している妹の Celia は "You know, Dodo, it is very bad. You have disappointed us all so. And I can't think that it ever will be —You never can go and live that way. . . and you might have gone on all your life doing what you like." と言ったのにたいして、Dorothea は "On the contrary, dear, I never could do anything that I liked. I have never carried out any plan yet." (p. 600) と答える。危険な子供、なにをしでかすかわからない娘 Maggie 同様に、Dorothea も Celia の目からみればいつも失敗ばかりしていて、"You know what mistakes you have always been making, Dodo, and this another. . .", 変わり者なのである。

富と地位が結婚の最も重要な条件であった時代に、富を捨て、これから自分たちで社会的地位を築いてゆかなければならないという人を敢えて選ぶ Dorothea の決断。第83章は、雷鳴と稲妻、雨風という自然界の効力を交えて、因襲を洗い流し、抑圧を吹きとばして、内から燃え出してくるものに電光をあてて、それまでの過ちを洗い去って、Virgin Mary から自然な熱い血の通う女へと再生する場面である。新しい女、女が自我を主張し、解放を求めることができたのは先ず恋愛だったといわれるが、Dorothea もそんなところに落ち着いたようである。このあたりの Dorothea の感情の動きをこの章の中からあげ

てみる。

... and Dorothea was afraid of her own emotion. She looked as if there were a spell upon her, keep her motionless and hindering her from unclasping her hands, while some tense, grave yearning was imprisoned within her eyes. ... her heart was swelling, and it was difficult to go on; ... (p. 591-2)

Her lips trembled, and so did his. It was never known which lips were the first to move towards the other lips; but they kissed tremblingly, ... (p. 593)

“Oh, I cannot bear it—my heart will break,” said Dorothea, starting from her seat, the flood of her young passion bearing down all the obstructions which had kept her silent—the great tears rising and falling in an instant: ” I don't mind poverty—I hate my wealth. ” (p. 594)

IV

「革新的な女性人物」, 「自己実現への道を探る女性人物」というエリオットの意図も, Dorothea のようなヒロインを創り出しながら, どんなにストーリーを進めてみても, 結末はやはりこんなことだったのかと物足りなさを感じざるを得ないかも知れない。しかし小説はその時代の産物であって, 自ずとその当時の社会の制約を受けており, 時代の枠を大きく越えた結末などあろうはずがない。19世紀エリオットが生きた頃の英国社会, 女性のおかれた状況を知ったうえで, *Middlemarch* を読んでくる時, Dorothea の描き方がよりよく理解できるとともに, その試み・努力はやがて来るべき未来を示唆していることに気づく。エリオットは最後に Ladislaw は “an ardent public man” になったと, 次のように語っている。

They were bound to each other by a love stronger than any impulses which could have marred it. No life would have been possible to Dorotea which was not filled with emotion, and she had now a life filled also with a beneficent activity which she had not the doubtful pains of discovering and marking out for herself. Will became an ardent public man, working well in those times when reforms were begun with a young hopefulness. . . Dorothea could have liked nothing better, since wrongs existed, than that her husband should be in the thick of a struggle against them, and that she should give him wifely help. Many who knew her, thought it a pity that so substantive and rare a creature would have been absorbed into the life of another, and be only known in a certain circle as a wife and mother. (p. 610-11)

それでもやはり, *Middlemarch* のような地方では, Dorothea のような生き方は, 素敵な女性が, 父親よりも年上の病弱な聖職者と結婚し, 一年余りで夫が死んだ後, 遺産をあきらめても, 財産もなく生れもよくない若い男と結婚したといわれて, 本当に「素敵な女性」なら, いずれにしてもそんな結婚はしな

かったはずだといわれるのだった。

エリオットはさらに次のようなコメントを加えている。

Certainly those determining acts of her life were not ideally beautiful. They were the mixed result of young and noble impulse struggling amidst the condition of an imperfect social state, in which great feelings will often take the aspect of error, and great faith the aspect of illusion. (p. 612)

19世紀の英国という、世界に先がけて政治や社会が大きく変化しつつあった中で、女流作家エリオットがその作品の中に描き続けていった主題の一つは「女性の自己実現」であり、その限界であったといえる。再び Barbara Hardy からの引用 “George Eliot’s continued irony plays significantly on the Maggies and Dorotheas and Gwendrens who have no social medium for their energies.”¹³⁾ で結びとする。

Notes

- 1) Barbara Hardy, *The Novels of George Eliot* (London: The Athlone Press, 1981), p. 63.
- 2) *Ibid.*, p. 51.
- 3) Merryn Williams, *Women in the English Novel 1800–1900* (London: Macmillan Press, 1985), p. 146.
- 4) *Ibid.*, p. 143
- 5) *Ibid.*, p. 1. (日本語訳は筆者)
- 6) *Ibid.*, p. 2.
- 7) George Eliot, *Middlemarch* (Boston: Yale University), p. xi.
- 8) *Ibid.*, p. 20. 以後同書からの引用はページ数を本文に記す。
- 9) *Women in the English Novel 1800–1900*, p. 146.
- 10) 川本静子, 『G. エリオットー他者との絆を求めて』(冬樹社, 1980), p. 202.
- 11) *Ibid.*, p. 203. () 内は筆者。
- 12) 織田元子, 『フェミニズム批評—理論化をめざして』(勁草書房, 1988), p. 202, 205.
- 13) *The Novels of George Eliot*, p. 57.